

戦略学序説

清 水 龍 雄

紀要第12号('95年)において、戦略学研究の第1章に相当する「戦略の意義」について論じた。本号以降では、戦略思想史に関する筆者の研究成果を述べる。

2 欧米戦略思想史〔1〕

2.1 戦略思想の歴史的考察

われわれが戦略思想を確立するにあたっては、まず先人の戦略思想の跡をたどって見る必要がある。本章以降で、西洋・東洋およびわが国に分けて戦略思想史の概要を検討したい。戦略思想史の主体が軍事戦略思想史となるのは、止むを得ないところである。

人類の歴史の中で、戦争は大小を問わず絶える事がなく、つれて諸国家の消長もまた絶え間がなかった。従って戦争に関して、また国家の動向に関して戦略的に検討を加え意思決定をおこなった人物や、それらを観察し論評した人物は、数がざりなかったであろう。しかし戦略思想家という見地からは、古代シナの孫子などの例外を除けば、古代・中世の戦略思想として現代のわれわれが直接参考にするべきものは多くあるまい。

ただし近世以降の諸家の戦略思想なるものも、突如として出現したのではなく、戦略論者たちはそれぞれ過去の軍事・外交・政治の歴史的検証の上に自己の理論を構築して来た事は疑いもない。たとえば岡崎久彦が「戦略論とはすなわち戦史の研究・解釈であると断言しても、かなり正統派の考え方として通用します¹⁾」とまで言っている通りである。そこで筆者も、古代以降の戦史を中心として、戦略思想の時代的变化を概観することから始めたい。

(1) 西洋と東洋

西洋を対象とする歴史学なかんずく軍事史学は、古代ギリシャ・ローマ時代にまでさかのぼる。即ちBC1千年頃のギリシャにおけるポリスの成立から、同750年頃のローマ市の成立などを手始めに、現代に至るまでの2千数百年の期間を取り扱っている。人種の上では、いわゆる地中海文明を担ったギリシャ人やローマ人から、AD380年頃から北方から大移動して来たゲルマン民族への交替の歴史である。

これに対して東洋は、シナ大陸をはじめ西アジア、中央アジアなどでそれぞれ独特の文化圏を形成して来た、広範で長期の歴史を有している。古代オリエント文明は、東に向かって西アジア、中央アジア、インドなどに伝わり、更にシナから日本にまでその影響を及ぼしている。西に向ってはギリシャ・ローマ文明を開花させた。このような文化交流の契機となったのが、戦争や民族移動や交易であった。

(2) 国家と戦争

浅野祐吾は、国家の体制と戦争の形態を世界的に次の4つの時代に分類しており²⁾、妥当である。

第1期	民族国家創成時代	BC6世紀以前
第2期	世界的国家試練時代	BC6~2世紀
第3期	国家体制変換時代	AD5~16世紀
第4期	近代国家時代	AD16世紀以降

民族国家創成時代

この時代に目立った戦争は、たとえばハムラビ王の戦い(BC1955)、サルゴン王の戦い(BC1800)、鳴條の戦い(BC1767)、アバリス大戦(BC1580)、エジプト外征戦争(BC1450)、牧野の戦い(BC

1) 岡崎久彦『戦略的思考とは何か』中公新書 1983年, p13.

2) 浅野祐吾『軍事思想史入門』原書房 1979年, p14.

1122) などである。

この時代の戦争は、近代とは異なった意味ではあるが、一種の国民戦争であったと解釈できる。武器は未発達で、日常の狩猟用具や農耕用具と大差はなかったであろう。

一般的に「北方の遊牧民族が、南方に定着している農業国家を滅してこれに代り、定着農耕民族に変化した頃、再び北方の新しい遊牧民族に征服される」という公式が、繰り返し妥当したといえる。古代国家における戦略の優劣はあまり目立つことなく、むしろ遊牧民の勇猛心や機動力や武器が、農耕民族の諸資源を圧倒したと見てよい。

世界的国家試練時代

この時代にはペルシャ大帝国戦争(BC 550)、アレキサンドロス大王戦争(BC 336~)、アショカ王戦争(BC 264~)、ローマ帝国戦争(BC 264~)、秦大帝国戦争(BC 256~)、漢大帝国戦争(BC 202~)などが含まれる。兵力規模は拡大し、陸戦と共に海戦も重要となった。この時代には傭兵部隊もあったが常備軍もあり、戦時には大動員されるようになった。従って大軍を指揮する技術も進歩し、シナやギリシャなどでは戦略や戦術の思想も芽生えている。

国家体制変換時代

この時代を彩る主要な戦争は、アッチラ王の戦争(AD 451)、サラセン戦争(640~)、十字軍戦争(1096~)、ジンギスカン戦争(1211~)、元寇の役(1274~)、スイス独立戦争(1315~)、英佛百年戦争(1338~)、チムールの戦争(1400~)、アクバル大帝戦争(1556~)などである。この時代の特色は、アジアがヨーロッパを圧倒した事にある。特にジンギスカンの民族的戦略・戦術は、ヨーロッパに大きな影響を及ぼしている。

ヨーロッパにおいてはキリスト教文明が開花し、異教徒との宗教戦争も多かった。しかしこの種の戦争は、ヨーロッパの技術や商業の進歩に間接的に貢献したという一面も併せ持っている。この時代の戦争は概していわゆる「制限戦争」が多く、戦争目的が不明確な事も珍しくなかった。後代の総力戦のよ

うな激烈さに欠けていた。これまでの大戦争は多く遊牧民族対農耕民族という色彩を帯びていたが、次の近代になると資本主義国対非資本主義国の対立へと変化して行く。

近代国家時代

この時代における大戦争は、多く西欧で発生している。戦争の規模はさらに拡大して、ついには世界大戦にまで発展するに至った。戦域も拡大し、陸上・海上はもちろん、海中・空中にも及んだので、戦争は立体的に展開するようになった。兵器も発達して、大量殺りく、大量破壊がおこなわれるようになった。また近代戦が総力戦の形をとるようになると、軍事戦略以上に国家戦略が重視されるようになった。ただこの時代は、前半が第1期の民族国家創生時代に類似し、後半は世界大戦を契機として第2期に類似しているのが興味深い。

2.2 西洋戦略思想前史

(1) 古代兵器と戦略

もっともプリミティブな形式の戦争は、当然のことながら、白兵戦であったろう。戦いはまず投石や弓矢や投槍などで応酬し合い、その後接近して刀や槍や矛で白兵戦がおこなわれたであろう。はじめは部落同士の抗争という程度であったものが、国の領土が拡大し人民の数が増加するにつれて、軍隊も大規模化して機動力を必要とするようになった。

機動力は、馬と車両の利用である。当時の馬は小型で戦場での乗用には適さず、木製の戦車を牽引して駆けまわっていたと考えられる。この事は西洋も東洋も同様であった。

戦争をよく利用したのは、現トルコ国の首都アンカラ附近を根拠地として、BC 1400年頃には小アジアまで拡大したヒッタイト王国や、有名なツタンカーメン王を含むエジプト第18王朝であり、小径の二輪車を小型の馬に引かせたものであった。

しかし周辺の遊牧民族は馬を改良して大型化し、騎馬兵団を組織して行った。戦車に対する騎兵の優位は明白であった。騎兵への転換を急ったヒッタイトやエジプト王国は、兵器の開発とそれに伴う用兵の転換という戦略的な適応に失敗して滅びたので

あった。

(2) ギリシャ歩兵の威力

BC 5世紀のはじめにペルシャのダリウス1世は数回にわたってギリシャを侵攻したが、結局撃退された。うちBC 490年におけるアテネ軍の勝利は「マラトンの戦い」であり、この時のエピソードが現在のマラソン競走の起源とされている。

スパルタ軍を主力とするギリシャ陸上軍は、青銅製の鎧と楯で武装し長槍を持った装甲歩兵が主体であった。この装甲歩兵が横8列に密集して楯を接し、長槍の穂先にそろえて突撃するのである。これは、中世に至るまで多用されたファランクス(方陣形)であった。

ペルシャ軍の歩兵は軽装甲で弓と短槍で武装したが、軍の主力はむしろ機動性に富む軽装騎馬弓兵であった。戦いはギリシャ国内でおこなわれたので、その森林と草地の錯綜した地形においては、ペルシャの誇る騎兵隊もその機動性を減殺された。またペルシャ騎兵の半弓はギリシャ歩兵の重装甲には歯が立たず、ペルシャ軍は結局ギリシャ侵攻をあきらめて撤退する以外になかった。

この戦例においては、自国の地形に適した兵器の開発と訓練とに成功したギリシャ軍が、祖国防衛の精神力をもって果敢に戦ったために、ペルシャ軍の精鋭を撃退し得たものと評価できる。地域性に適した兵器や訓練という面では、大東亜戦争における東南アジアの日本軍や、ベトナム戦争における米軍の戦いぶりにも反省材料は多いだろう。さらには、地の利を得ない外国でマーケティングを実施する企業にとっては、現地に適した商品と売り方を準備する戦略が必要とされるであろう。

(3) アレキサンドロス大王

マケドニアの王アレキサンドロス(BC 356 ~ 323)は、父王フィリップスの暗殺により20才で即位し、その後わずか12年余の短い治世の間に、驚くべき業績を後世に残した。今となってはアレクサンドロスの戦略思想を明確に把握すべくもないのだ

が、彼の帝国拡大は人口過密を解消しただけでなく、ギリシャ文化の地域拡大はヘレニズム文化を誕生させるに至った。

彼は陣頭指揮の勇将であったが、他面アリストテレスの愛弟子として当代一流の知識人でもあった。エジプトに遠征し、ペルシャを滅ぼし、遠くインドにまで至ったアレクサンドロスは、みずからペルシャ王の娘と結婚したし、将兵がアジア人を妻とする事を許すなど、積極的に人類融和政策をとった。彼は自分の世界帝国を建設することにより、人種対立をも解消した平和世界を希求した、ウルトラ国際人であったともいえよう。

さてアレキサンドロスの軍隊は、東征の過程で機動性強化のニーズが高まった結果、スパルタ以来の伝統的な装甲歩兵の方陣形に、長剣と長槍を持つ装甲騎兵隊が加わった。まず約6mの長槍をたずえた装甲歩兵隊が、槍の穂先をそろえ方陣を組んで敵の正面を突破する。同時に、軽装で投げ槍・弩(いしゆみ)・投石機を使用する、現代の砲兵隊や機関銃隊に相当する部隊や、軽装甲の予備歩兵隊が援護した。この「投てき歩兵部隊」は、ペルシャ軍が戦車を引いた馬や戦象を混乱させる効果が大きかった。

装甲騎兵の方は貴族の出身者が多く、装甲歩兵の突撃によって動揺している敵軍を、更に徹底的に撃破する役割を果たした。騎兵の役割は、東方の弓兵から突撃兵へと変化したのである。また軽装甲で投げ槍と短剣を持つ軽騎兵は、不正規戦闘や偵察にも活用された。このような兵科の分化は、アレキサンドロス軍の戦闘力を著しく向上させる戦略要因となった。ペルシャのダリウス王と対決したBC 331年のアリベラの戦いの例では、重装歩兵3万人、軽装歩兵(予備、投てき兵)1万6千人、装甲騎兵4千人、軽騎兵6千人が参戦した³⁾。

ギリシャにおいてはまた科学技術の進歩による兵器の改良が相次ぎ、特に弩とバリスタ(投石機)の改良は著しかった。アレキサンドロスはこれら大型兵器を車に載せて遠征した。弩は最大射程800m、投石機は100kgの石を600mまで射出する能力があった⁴⁾。

3) 金子常規『兵器と戦術の世界史』原書房 1979年、p5.

4) 前掲書、p6.

(4) カンネーの戦い

アレキサンドロス大王の死後、彼の帝国は分裂し、ローマ共和国とカルタゴとの間で抗争が続いた。百年にも及ぶポエニ戦争である。第1次の戦いは、海軍の圧勝によってローマ側の勝利に終わった。第2次（BC 218～201）はハンニバル戦争と俗称される通り、カルタゴの将軍のハンニバルがスペインからアルプス山脈を越えてイタリア半島に入り、カンネーでローマ軍と対峙した。

カンネーの戦いを要約すれば、ローマ軍の伝統的な重装歩兵が正面にのみ強く側面に弱い点をカルタゴ軍が巧みに捉え、小集団の重装歩兵を機動運用し、その上に重装騎兵をも投入して、ローマ軍8万人をほとんど全滅にまで追い込んだものである。ここでも伝統に忠実で硬直化したローマ軍に対し、革新的な装備・編成と運用の思想が、長駆困難な遠征と敵地での戦闘という悪条件にも拘らず勝利したものである。つまりは戦略的優位性によって、戦術的劣性を克服し得たのである。

ハンニバルは戦には勝ったのであるが、カルタゴという国家および国民は、結局はローマによって滅ぼされて行くのである。伊藤憲一は、これを「大戦略なき悲劇」の好例としている⁵⁾。即ち何でも金で解決できると思っていた経済大国カルタゴの精神風土が国を亡ぼしたのであって、現今の日本もこれに似ていると警告している。筆者の戦略経営コンサルティングの経験に照らしても、「戦略なき企業は滅ぶ」の感は深い。

(5) 東ローマ騎兵とゲルマン騎兵

AD 395年に東西に分裂したローマ帝国は、その後しばらく軍事力の中心は歩兵と騎兵の間を揺れ動いていた。しかし4世紀以後に東方の騎馬民族が発明した蹄鉄、鞍、あぶみが発達して来るにつれて、騎兵の方が次第に優位を占めるようになった。西ローマ帝国はゴート人の装甲騎兵によって占領されてしまったが、東ローマ帝国の方はこれに反して、軍の主力をみずから歩兵から騎兵に移して行った。異民族の傭兵を主力としてはいたが、弓や槍の優れた装備と厳しい訓練が特徴的であった。

一方槍を主力とするゲルマン・ゴートの騎兵は東ローマ帝国軍の弓矢に悩まされ、その鎧は次第に厚くなって行った。警も鋼製に強化されると、鎧もますます厚く重くなり、ついに重装甲騎兵となった。9世紀のヨーロッパでは、戦場は鉄一色に塗りつぶされたと評される。重装甲騎兵は長槍を抱え、数名の従者を従えて敵の騎士と一騎討ちするルールとなって行った。ドン・キホーテの姿を頭に描いて見ればよい。封建制方式の戦闘方法は14世紀まで続く。わが国でも鎧武者が互いに名乗りをあげて一騎討ちする時期があった。歴史の進展の中には、このような類似が間々見られる。

(6) 「ギリシャ火」の導入

東ローマ帝国とイスラム教国との間では、抗争が繰り返されていた。イスラム教サラセンの攻撃は、主として海上から行われた。これを阻止するための新兵器が、7世紀に東方からシリアを経て伝来した。これが「ギリシャ火」である。ナフサに硫黄や松脂などを混ぜた液体であり、猛烈な火炎と黒煙をあげて敵を驚かした。水をかけても消えるどころか、ますます盛んに燃え上がるのであった。

この石油兵器は金属の筒から注いだり、砲弾に詰めて発射したり、布片にひたして矢や投槍につけて使ったりした。ギリシャ火兵器は同盟国にも貸し出されたが、ギリシャ火の成分は極秘とされた。ちょうど現代米軍の新型兵器をわが国の自衛隊に貸与する時、そのハイテク部品はブラックボックスで自衛隊は触れる事が出来ないというと同様である。

7～8世紀の間は、サラセン海軍がこの「古代型石油戦争」に敗れているし、後の10～11世紀には、コンスタンチノーブルを攻撃したゴート人、ロシア人の艦隊も、このギリシャ火によって撃退されている。その後はサラセン側もギリシャ火のノウハウを習得するに至り、十字軍時代には実戦に使用した。

(7) 再び重騎兵対軽騎兵

十字軍の遠征は、西欧キリスト教国が、聖地エルサレムをイスラム教徒の手から取り戻すことを目標として、1096～1270年の足かけ3世紀にわたり、主

5) 伊藤憲一『国家と戦略』中央公論社 1985年、p3～4。

要なものだけでも7~8回にわたって行われた大規模な東方遠征をいう。一国の利害を超えて、統一的な宗教的動機によって組織された諸国の同盟軍であったから、当初はきわめて戦略的な行動であったといえる。しかし長い間に当初目標はいつの間にか空虚なタテマエと化し、ホンネの方は東方への植民や東西貿易の利権獲得へと移っていった。この意味できわめて不可思議な戦争であった。

十字軍とイスラム教徒軍の戦闘は、突進して一騎討ちをいどむ重装甲の十字軍騎士と、敵を遠巻きにして包囲し、弓矢で制圧しようとするイスラム軽騎兵の優劣争いとなった。諸戦においては、イスラム軍は十字軍の重厚な突撃にあって敗退した。しかし12世紀に入るや、イスラム軍は接戦を避けて渦巻戦法をとり、雨あられと矢を放って十字軍を制圧した。その後は戦場の地形などの諸条件によって両軍の優劣はまちまちで、どちらか一方の絶対優位にはならず、両軍共に自軍の優越を信じたまま170年余の戦いを継続していった。

(8) モンゴル騎兵の優越

13世紀のヨーロッパ中部平原でも、西の重騎兵はモンゴル軽騎兵の席捲を許していた。西征モンゴル軍はシレジア地方でポーランド・ドイツ連合軍を破り、グランではハンガリー軍を破った。モンゴル軍の主力は軽い革鎧を着け、弓・槍・剣で武装した騎兵であったが、他に騎兵投てき隊もあって、投石機・弩弓なども使用した。ヨーロッパの重騎兵が突撃して来ると、周囲から押し包んで射撃を加え、相手を弱らせた。

モンゴル騎兵隊はこのように極めて機動性に富んだ強力な軍隊であったが、やがてゲルマンの森林地帯に到達すると、そこは彼等の戦場として不適であった。加えて、モンゴル帝国の後継者問題などもあり、彼等はいよいよ自発的な侵攻を中止して軍を引いた。ヨーロッパは、危うく救われたのである。

2.3 フリートリッヒ大王時代へ

(1) マキャベリ

本節において、主としてフリートリッヒ大王とその時代に焦点を合せて論述しようとしているが、そ

れに先立って近代の幕明けに位置するマキャベリにふれておきたい。

ニコロ・マキャベリ (Niccolo Machiavelli, 1469~1527) はイタリアのフィレンツェ王国宰相であり、また「君主論」「政略論」「戦術論」の三部作を著した思想家である。

いわゆるマキャベリズムは、ともすれば悪い意味での権謀術策主義と受けとられやすいのであるが、それはこの時代の外交の一般的なやり方だったのであって、マキャベリだけの責任とは言えない。戦略思想史への彼の貢献は、次の3点にある。

第1は前代の持久戦略から転じて、決戦戦略を提案した事である。第2はその為に小規模の騎士的戦闘から、歩兵による集団決戦への転換を提案した事である。第3はこれに要する兵員を、これまでの傭兵によることなく、忠誠心ある自国民の徴兵によるべきだと提案した事である。

これらの創造的思想が、すでに16世紀初頭に出現した事に、我々は驚かざるを得ない。これらの思想が現実化するのには、その後2世紀をへだてたナポレオン時代になってからである。

(2) 三十年戦争とその後

1618~48年の「三十年戦争 (Der Dreißigjahrige Krieg)」は、ヨーロッパにおける最後で最大の宗教戦争である。はじめはドイツ国内のカトリック諸侯とプロテスタント諸侯の争いであったものが、デンマーク・スウェーデン・オランダ・イギリス・フランス・スペインの諸国が介入し、ついに複雑な国際戦争となり、ドイツ全土の荒廃の後にはじめて止んだ。その惨状を渡部昇一 (上智大学) は次のように記述している。

「ドイツはかつて『神の庭』と呼ばれていたことがあったが、それが三十年にわたって一大戦場となり、平和条約が締結された時、ドイツの人口は三十年前の三分の一以下の七百万 (一説に九百万) に減っていた。六十パーセント以上の人口が消えたのである。第二次大戦で日本が失った人口は、あれほどおびただしく悲惨な大戦であったにもかかわらず約六パーセントであったことを考えれば、人口比率から見たその災厄の大きさが推測されようというもの

はないか⁶⁾」

渡部はさらに、宗教的情熱からはじまった三十年戦争が終った時、人々は宗教を戦うに値するものと思わなくなっていた事を記す。ここでも人間同士が戦争をするという事の空しさが、よく現われているのである。

三十年戦争によって国々は戦争の無意味さを覚り、以後戦争はなくなったのであろうか。決してそうではない。しかし17世紀後半から18世紀にかけて、戦争は国際法の理念を受容し、ルールに則ったスポーツ競技のようなそれへと一変した。これが即ち、「制限戦争」と呼ばれる新方式の戦争である。

制限戦争は絶対君主の常備軍同士だけの間の戦争であり、一般市民は「関係ない」のが原則であった。なぜ戦争をするのかといえば、外交を有利に進めたいからであり、こうなれば敵を撃滅する事などは問題ではなくなる。即ち戦争はまるでサッカーやラグビーの試合のように、両軍が互いに進退を繰り返し、得点の多い方が勝ちになるという風であった。

それでいながら、戦闘そのものは至極マジメにおこなわれ、手抜きはなかったというから面白い。前記渡部の説明によれば、戦闘員の死傷率はこの時代が他のどの時代よりも高く、勝っても負けても30～50%の兵力を失う覚悟が必要であった。

当時の兵士は後の時代の国民軍と異なって徴兵制でなかったから、貧民の子弟や都市の失業者や、金でやとわれた傭兵で構成されていた。そこで食糧や衣服の支給が滞ったりすれば、たちまち大量の脱走兵が出るのである。強行軍をしても同じ結果になるので、機動力を期待できない軍隊であった。将校の方も平時のぜい沢な生活をそのまま引きずって歩いたから、「江戸時代の大名行列さながら」という行軍になったものである。

このような軍隊では、勝っても敵を追撃して撃破することなど不可能であった。結局のところは、判定勝ちに持ち込むしかないのである。ここでは、ク

ラウゼヴィッツのいう「戦争は政治（外交の意 筆者注）におけるとは異なる手段をもってする政治の継続にほかならない⁷⁾」事が、率直な形で生きていた。

とにかく金のかかる軍隊であった。人員を集める事も、それを軍隊として使えるように訓練する事も大変だった。もし戦闘をすれば消耗は大きいのであるから、それは「一種の恐ろしい冒険⁸⁾」だったのである。従って敵の補給路を断つというのが、最も上手な戦術であった。即ち両軍のリソース（資源）には大差がなくて、將軍の用兵技術がものをいう、きわめてゲーム性の強い戦争がおこなわれた。この意味では、18世紀は戦術の時代であったといえよう。

(3) フリートリッヒ大王

大王と呼ばれるフリートリッヒ・ヴィルヘルム (Friedrich Wilhelm, 在位 1740～86) は、即位したその年に無警告でシレジアに侵入した。これは後にヒトラーなどによって応用された電撃戦 (Blitzkrieg) と呼ばれる戦術の原型であった⁹⁾。前後3回にわたるシレジア戦争の結果、彼の王国は2倍になっていた。

電撃戦の実行といい、陣頭指揮で生死を賭して大敵と戦った事といい、フリートリッヒはゲーム性の強い制限戦争を超えていた。その上当時のプロイセンは王朝国家として仕上がっており、王権の支配力が強かった。ルター派プロテスタントが国教であり、教会そのものが人々に王への服従を教えたのである。さらには Junker (Junker) という小貴族の集団が、常備軍の幹部将校を占めていた¹⁰⁾。

フリートリッヒが即位した時、プロイセンの人口はわずか250万人であった。当時のヨーロッパではオーストリアとイギリスが1千万人、フランスが2千万人、ロシアには4千万人の人口があったと推定される。「七年戦争」(1756～63)ではフリートリッヒはオーストリア・フランス・ロシアの3大国連合に加

6) 渡部昇一『ドイツ参謀本部』中公新書 1974年, p7.

7) クラウゼヴィッツ著、篠田英雄訳『戦争論』岩波文庫 1968年, 上巻p58.

8) E・M・アール編著、山田・石塚・伊藤訳『新戦略の創始者』原書房 1978年, 上巻第3章p49.

9) 前掲書, 上巻p50ff.

10) 前掲『ドイツ参謀本部』, p19ff.

えてスウェーデンとも戦い、困難な多正面作戦を余儀なくされたのである。わずかにイギリスだけは彼の味方であったが、財政援助しか期待し得なかった。小国プロイセンは、人口比で実に30:1の圧倒的劣勢にあった、しかし兵力では連合国軍40万人に対して、20万の兵力を保持してはいた。それにしても、従来の軍事的評価基準で見れば、とても勝ち目はなかったのである。

(4) プロイセンの戦略力

フリードリヒは七年戦争を、敵よりも圧倒的に貧弱なりソース(資源)で戦わざるを得なかったが、前後16回にわたる主要な戦闘を、勝負半々にまで持ち込むことができた。そして全ヨーロッパがプロイセンのこの「壮挙」に驚嘆した結果として、フリードリヒは戦後の平和交渉において己れの主張を貫徹し、その国土を倍加することに成功したのである。ここに、新たな軍事大国が誕生した。フリードリヒは制限戦略ゲームを最も巧みに戦い抜き、諸大国を譲歩せしめたといえよう。

ちなみに、筆者は日頃企業の経営コンサルティングに従事しているが、企業の実力はその資源と戦略の関数であると感じている。それも資源と戦略の関数は加算ではなく、乗算の関係にあると思う。モデル化すれば

$$\text{経営力} = f\{(\text{資源力}) \times (\text{戦略力})\}$$

となる。フリードリヒも、乏しい資源力を卓抜な戦略力でカバーして実戦と外交戦に勝利し、自国の経営に成功したことになる。

七年戦争を耐え抜いた戦略的要因を、渡部昇一のまとめにならって、次の5カ条に整理して見よう¹¹⁾。

国家体制

国王自身が最高司令官として戦場に出て来るし、ユンカー階級は親代々の将校団として王に服従した。国王が大元帥であるから、軍服は最もカッコイイ礼服として社交場で通用した。戦時には国家予算の、実に92%の軍事費を支出し得た。GNPの1%枠を議論している国から見ると、ほとんど言葉を失う

のである。まとめれば、プロイセンの伝統である組織戦略の優越性を、フリードリヒは更に補強したといえよう。

軍制の確立

父王以来の厳格な軍律の維持に加えて、厳しい訓練を実施した結果、命令を間違いなく実行に移せるという優秀な軍隊が仕上がっていた。これは他国に比べて、大いに有利であった。用兵の妙がキーフクターとなる制限戦争における優位性は、前項の組織戦略の実施面に、よく現われている。しかし現実には常に理想的である事は不可能で、例えば1744年には逃亡者が多数で部隊が崩壊寸前にまで至り、ボヘミアへの進軍を中止せざるを得ないといった事態も起きている¹²⁾。

機動力

前述した通り、制限戦争時代の軍隊の行動に機動性を加えたため、電撃戦といい得るほどに行軍のスピードアップができた。この事により、敵の補給線を断つという戦術が容易に実施できた。同時に自軍のロジスティクスは確保されたから、自軍の結束は強化されたのである。

技術改良

フリードリヒは、創意工夫に富んだ人物であった。大砲を引く馬を縦列にして戦闘中の移動を可能にしたり、砲身が太く短い臼砲の効果を認めてこれを増強したり、小銃のさく杖(込め棒)を木から鉄に代えて能率アップしたなど、技術改良に成果を挙げた。

陣頭指揮

フリードリヒは、自身が陣頭指揮型の勇将であった。当時の將軍達がどちらかといえば戦闘を避ける傾向にあったのと、好対照を見せている。この迫力が、七年戦争を収拾する平和会議においても、非常に有利に働いている。

その後のフリードリヒは、死ぬまでの20余年にわたって、一度も本格的な戦闘をしていないというのが面白い。軍隊を進めるだけで、すべて戦わずして話がついたという事であり、制限戦争の理想を達

11) 前掲書, p 24 ~ 26 .

12) 前掲『新戦略の創始者』, 上巻 p 53 .

成したといえるであろう。

(5) フリートリッヒとナポレオン

大王フリートリッヒは、当時のどちらかといえば厭戦的な諸王の中で、きわ立って果敢でかつ戦略的であった。この意味でフリートリッヒは、むしろ後のナポレオンと対比されよう。またナポレオンもフリートリッヒを尊敬し、学んだ事も多かったと伝えられている。戦闘を恐れず陣頭指揮にすぐれていた事でも、また行動のスピードアップを実行した点でも、共通のキーファクターによる成功が目立つ。

しかし両者には基本的な相違が見られる。それは戦略目標の設定にある。フリートリッヒの戦略目標は、シュレージェン地方の確保という限定目標であった。これに注力した結果、人口では即位時の3倍の600万人に増大し、国は繁栄し文化も興隆した。彼自身も晩年の20余年は戦争をしないですんでいる。彼の戦争は敵国の撃滅や敵軍の全滅を企図していなかった。ここに、制限戦争の旗手としてのフリートリッヒの本領がある。他方ナポレオンの戦争は目標を制限せず、結果としてヨーロッパ諸国がこぞって戦乱に巻き込まれる事になってしまったのである。

(6) フリートリッヒの著作

フリートリッヒは勇将であっただけでなく、また軍事に関する著作をも残している。最初の主要な著作は、1748年に書かれた『戦争の一般原則』であり、これは2度にわたるシレジア戦争の経験を基にしている。その後1768年には後継者育成の意図のもとに『軍事遺言』を著し、ついで1771年には、將軍達のために『布陣法および戦術の大意』を著した。この間、自国陸軍各兵科の教育訓練テキストも数多く残している。彼の最後の著作は1782年の『教訓』であるとされているので、約40年にわたって精力的に著作を残し、家臣達を数え続けたのである。

ちなみに、フリートリッヒは軍事学のみならず、文学や音楽にも素人ばなれした才能があり、またヴォルテールと親しく交わるなど、大変な文化人でもあったようだ。すぐれた軍人が意外に文化的であった例としては、先に述べたアレキサンドロス大

王や、後のドイツ参謀総長、大モルトケなどがあげられよう。

(7) 参謀本部の萌芽

かの有名なドイツ参謀本部の萌芽は、フリートリッヒ大王の曾祖父である大選挙侯フリートリッヒ・ヴィルヘルム時代の1640年代にすでに見られる。それは当時の最優秀の軍制を有するといわれたスウェーデン軍にならったもので、兵站幕僚といわれる、技術色の強い部署であった。当時において、真の参謀総長は、大選挙侯その人であった。この将況下での兵站幕僚は、戦時における臨時小編成の組織であった。

それ以降の百年間というものは、大した変化は見られなかった。フリートリッヒ大王の時代にも、組織的には前代とほぼ同様の形から始まったのである。そして彼の治世の中で、必要に応じて新しい組織が追加されて行った。

その第1は、当初20余名であった兵站幕僚の下に、多数の伝令員がつくようにした事である。多正面作戦や分散行軍が増加し、緊密な連絡の必要性が高まったからである。

第2に、これを発展させた「旅団副官」と呼ばれるスタッフが置かれた。彼らは連絡将校でもあったが、情報を収集して司令官を補佐する役割をも果たした。フリートリッヒは、この種のスタッフの育成に熱心であったと伝えられる。

第3に「高級副官」制度の発展である。当時的高级副官は将校たちの人事考課の仕事をしていたのであるが、多方面作戦の実施のために大規模な軍団が編成されるようになると、連絡業務も旅団副官だけでは足りなくなった。フリートリッヒは各軍団長に高級副官をつけ、自分との間のコミュニケーションの徹底をはかった。しかし当時の彼らは未だ連絡要員やレポーターに止まり、参謀と呼ぶには心もとない存在であったと思われる。

(8) 最初の参謀長

フリートリッヒ大王も、彼自身が自分を補佐する有能な戦略スタッフでもあった。それ故に、かえって家臣のスタッフ育成に不熱心だったという見方が

できる。さすがに晩年になると、何でも自分で考えて命令するのが面倒になったものらしい。ここにドイツ軍事史上はじめての、実質的な参謀長の役割を果たす人物が任命された。彼の名をアンハルト (Heinrich Wilhelm von Anhalt) という。またの名をグスタフゾーンともいった。

アンハルトは兵站幕僚としてフリードリッヒの目にとまり、1761年に貴族に列せられ、1765年から81年まで専任高級副官兼兵站部長であった。ただし兵隊の位としては大佐であったから、将軍達に直接命令するような存在ではなく、むしろ大王の個人スタッフに近かったと思われる。彼はプロイセン陸軍の中でも無名のまま、フリードリッヒ晩年の「不戦の戦略」を立案していたのである。参謀の無名性 (anonymity) がプロイセン参謀本部の伝統となっていく事は、渡部昇一 (上智大学) も指摘しているところである¹³⁾。

筆者は何故かこの無名のアンハルトを、かの世界一のエクセレント・カンパニーと称されるシュルンベルジェ社の総帥ジャン・リブーの個人スタッフ・クロード・バックスになぞられてしまうのである。彼は35年間にわたって肩書なしの平社員で、秘書もつけず、社内にはいかなる会議にも出席でき、リブーにだけ報告した。シュルンベルジェ社が今日あるのは、参謀としてのバックスの力が何ほどか寄与したことによるといっても過言ではあるまい¹⁴⁾。

2.4 ナポレオン戦争の時代

(1) 師団の誕生

フランス革命の直前において、フランスは七年戦争でイギリスに敗れ、1763年のパリ平和条約によって海外領土を失い、屈辱感をかみしめていた。当時フランス軍では、戦略上注目すべき改良がおこなわれている。その1は大砲の改良である。グリボーバルは大砲の部品交換を可能にして射撃精度を高め、また砲の重量軽減に成功して、機動力を増大させた。

その2は師団 (division) の編成である。これは1

つの軍団を、歩兵・騎兵・砲兵の3兵科を包括した独立性の強いいくつかの集団に分割 (divide) したものである。ここにおいて、野戦における「戦略集団」が初めて形成されることになった。師団長である将軍は大幅に権限を委譲され、自己のコントロールの下に自主的な戦略行動をとり得るようになった。

(2) ギベールの著作

ルイ十六世時代の軍人で、理論家でもあったギベール伯 (Comte de Guibert, 1743~90) は、若くして『論文』および『戦術一般論』を著した。前者は彼が将校としてドイツとコルシカに勤務中の著作であり、後者は1772年、彼が29才の時の著作である。

『論文』はフリードリッヒ大王を賞賛してその戦術を解説したものであるが、R. R. パーマー (プリンストン大学) は次のように記している¹⁵⁾。「風評によるとフレデリック (フリードリッヒ大王 筆者注) は『論文』を読んで、この生意気な若者に彼の秘密を見抜かれたことを知り激怒したと伝えられている。...それがしばしばフレデリック流の戦争の上をいっている事は確実である。」引用文中の「それ」は、ギベールによるフリードリッヒの戦術の分析内容を指していよう。

その後に著した『戦術一般論』も話題を呼んだので、ギベールは社交界に乗り出して恋愛問題をおこしたり、陸軍省に勤務したりした末に、フランス革命の初期の1790年にギロチンにかかって粛清されてしまうのである。ともかく天才肌で、派手な人物ではあったらしい。著者の人柄はともかく、『戦術一般論』の中で戦略的テーマについて言及されている事が、我々にとっては重要である。

その1は、国民軍の必要性を説いた事である。当時の状況分析の上に立って市民革命を予言し、革命政府は傭兵を廃止して国民軍を組織化せよと主張した。彼の予言した市民革命そのものが、彼の死に追いやったのは皮肉である。

その2は、「いかなる時代、場所、兵科にも共通する軍事科学」を確立を説いた事である。今日におけ

13) 前掲『ドイツ参謀本部』, p 32ff.

14) ケン・オーレック著、稲森和夫監訳『パーフェクト・カンパニー』徳間書店 1984年, p 122ff.

15) 前掲『新戦略の創始者』, 上巻 p 61.

る戦略研究である。

ギベールに関しては、その思想が一貫性を欠いているという批評があり、軍事思想家としては今日ではあまり重視されない。しかし前述のような戦略思想の先進性と共に、ナポレオンの戦略を啓発した事を見逃すべきではない。ナポレオン自身は天才的な戦略実践家であった。そこでナポレオンは軍事の革新者ではなく、「拝借者」であるという酷評も存在する。

(3) フランス革命からナポレオン戦争へ

1789年7月14日のバステューユ牢獄解放から、ナポレオンがヨーロッパを席捲し、1815年6月のワーテルローの戦いを経て、10月にセントヘレナに流されるまでの20余年間に、軍事的にも大革命があった。一時代を画すものといえよう。

フランス革命が成り、1791年に最初の憲法が制定された後革命戦争がおこり、プロイセンやオーストリアと戦端が開かれた。そして次々にヨーロッパ諸国に波及して大戦争となった。これがナポレオン戦争である。

ナポレオン戦争の経過説明は省略するが、戦争史上の革命的な出来事は、国民総動員の実現と、これによって出現した軍事的素人集団の訓練、組織化、運用問題であった。

1812年のナポレオンのロシア遠征軍は、50万人を越えていたし、翌13年に再び敗退したライプツィヒのいわゆる「諸国民の戦い」でも50万人を超える大軍が交戦したという。これらは当時において史上最大規模であっただけでなく、その後第一次世界大戦に至るまで、これだけの大規模戦はなかった。まさに未曾有の大戦がおこなわれたのである。これら大規模戦の連続により、フランスはその人的資源を使い果たしてしまったといえよう。

(4) ナポレオンの用兵思想

ナポレオンが実行したフランス革命軍の戦闘行動の背後に浮かび上った用兵思想は、次のようにまとめられるであろう。その1は決戦思想である。それ以前における用兵が、いわゆる将棋の駒運びであったのに対して、フランス軍の革命のために生死を賭して敵を撃滅する精神をあらわにした。即ち用兵の中に、軍隊の志気(morale)の問題が大きな要因を占めるようになったことである。これをとりまとめて行動力に変えたのが、ナポレオンのリーダーシップであった。

しかし一方では、大軍の運用に不可欠な組織論の不全、特に参謀スタッフ部門の軽視は、ナポレオンの軍事思想家としての限界を明らかに示している。現に彼自身が直接指揮をとっていない戦場では、フランス軍はけっこう敗れているのである。

その2は、兵力優位主義である。従来から兵力が勝っている方が戦いに有利である事は知られていたが、この時代になると徴兵制によって兵数を増大する事が容易になった。師団編成の各部隊は、必要な時に特定の戦場に大兵力を集中する事を可能にした。

兵力比によって敵を圧倒するという原則は、後代の第2次世界大戦において、ランチェスターの法則として数式化され、オペレーションズ・リサーチ(OR)の成立につながるのである。手荒くいえば、敵の3倍の兵力があれば、その戦場で必ず勝てるという事である。

その3は、機動力の重視である。敵を撃滅するためには、前述した兵力の集中を敏速におこなえる事、勝った時には追撃して、敵を蹴ちらす事が条件になる。ナポレオン軍の場合、軍隊の行軍は1日当たり45kmに達し、諸国から驚異の眼で見られていた。その背景には工業化の進展による車両の進歩、道路の整備、兵站のバックアップがあった。

参考文献

- ・アール編著，山田・石塚・伊藤訳『新戦略の創始者』原書房 1978年
- ・浅野祐吾『軍事思想史入門』原書房 1979年
- ・伊藤憲一『国家と戦略』中央公論社 1985年
- ・オーレッタ著，稲森和夫監訳『パーフェクト・カンパニー』徳間書店 1984年
- ・岡崎久彦『戦略的思考とは何か』中公新書 1983年
- ・金子常規『兵器と戦術の世界史』原書房 1979年
- ・クラウゼヴィッツ著，篠田英雄訳『戦争論』岩波文庫 1968年
- ・渡部昇一『ドイツ参謀本部』中公新書 1974年